

司

本日の学び：「真理とは何か」 テキスト：ヨハネ18章28-38節前半

【理解の手がかりとして】

本日の箇所は「ピラトの尋問」の場面である。ピラトの官邸にはユダヤ人たちは「入らなかった」（18:28）とある。ユダヤ人にとって異邦人との接触は祭儀上の汚れとされていたからである。彼らは官邸の外に留まり、外から訴えを叫んだわけである。

ゆえに止む無く総督ピラト自身が外に出て来て、彼らの訴えの内容を尋ねる。「どういう罪でこの男を訴えるのか」（18:29）と。それに対するユダヤ人の返答は「この男が悪いことをしていなかったら、あなたに引き渡しはしなかったでしょう」（18:30）であった。何とも答えになっていない応え方である。

ユダヤ当局がイエス様を敵視し殺害まで企てるようになった理由は、ユダヤ当局が自らの体制が揺るがされることを恐れたからである。「この男は多くのしるしを行っているが、どうすればよいか。このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう」（11:48）と大祭司カイアファが言った通りである。

ユダヤ人らの関心は、ただひたすらに体制を守る事にあり、そのためにローマとの共存を保つことにあった（本意ではないとしても）。一方のローマ側（ピラト）も、この被告イエスを手にかける事には躊躇が見られる。出来れば、この問題に関わり合いたくない、それが本音である。「あなたたちが引き取って、自分たちの律法に従って裁け」（18:31）と言うのがその表れである。なんとも、人間の罪のいやらしさであろうか。皆が皆自己保身に走る。責任を負わない。そういう人間模様の中で、ただ神の計画は粛々と進んでいく。

ユダヤ人は応えた。「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」（18:32）と。確かにそうだった。イエス様の時代のユダヤは総督直轄領となっており、死刑執行権は総督だけにあった。これは、ローマに対する反乱防止でもあり、ローマ側につく者を現地のユダヤ権力が処刑することを防ぐ意味もあったとされている。

しかし、この後に続く一節が意味深い。「それは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、イエスの言われた言葉が実現するためであった」（18:32）。この「イエスの言われた言葉」とは、「人の子も上げられねばならない」（3:14）を指すと理解する。この「上げられる」とは、十字架に磔にされる姿、すなわち十字架で殺されることである。であるから、ここでユダヤ人がピラトに

イエス様の処刑を求めたことは、ユダヤ教式の石打の刑（律法の定め）ではなく、ローマ式の十字架刑によって死なれるために必然（実は「神の計画」）であったのである。

さて、ピラトは官邸に入りイエス様と一対一で対面する。ここから 38 節前半までは、イエス様とピラトとの一対一の対話となる。ピラトは問う。「お前がユダヤ人の王なのか」（18:33）と。ここに先に記されなかったユダヤ人側の告発理由が現れる。つまり「イエスという男は、自分が王であると称して民衆の反ローマ運動を扇動している」といった告発をしたのであろう。実際には、ユダヤ教当局においては、政治的文脈よりも宗教的文脈（律法違反・安息日問題・神殿冒瀆）の方が大問題であり、それがゆえにイエス様を無き者にしようと欲したのであったが、政治的にローマに目を付けられても困るという理由で、政治局面に限って「王と自称する者」と告発したのであろう。ローマ人がユダヤ教の宗教問題に理解も関心もないことをよく知っていたからである。

イエス様はそれに対し「あなたは自分の考えで、そう言うのですか・・・」（18:34）と切り返される。共観福音書では「それは、あなたが言っていることです」（マタイ 27:11 他）とだけ応えられている。これは「あなた」が強調された文で、「そう言うのはあなたの方だ」という意味である。これは何もイエス様が「わたしは王ではない」と否定されたわけではない。ましてや「わたしは言っていない。あなたが言っているだけではないか」と自己責任を回避されたわけではない。

大切なのは「あなたはどう思うのか？」という問いである。「・・・がこう言ったから」というステレオタイプではなく、「わたしにとってイエスは何者なのか」という自覚的認識が問われているのである。この自覚的・主体的な生き方への問いは、周りの組織とか状況に左右されて、責任転嫁にあげくれようとするユダヤ・ローマ双方の人々に対する強烈な反論である。

しかしピラトは言う。「わたしはユダヤ人なのか。・・・」（18:35）。ピラトにおいては依然として「ローマかユダヤか」というこの世の勢力構図しか頭がない。しかし、しかし、イエス様は全く別の次元に立っておられる。イエス様の「わたしの国」（18:36）は「ユダヤ」とか「ローマ」とかではなく「神の国」なのである。と言っても、それは決してこの世離れした彼岸の話でもない。この世において、しかし全く価値観の違う国、父なる神のご意志が完全に表わされ、支配する国（世界）である。神の国とは「神の支配」のことであり、それは人が境界を設けられるような狭い範疇ではない。

ピラトは答える。「それでは、やはり王なのか」（18:37）と。この期に及んで、と思う。イエス様がピラトとの対話で期待されるのは「主よ、あなたこそ王！」という気づきと告白であって、問い返しではない。しかしまたまたピラトは問い返す。「真理とは何か」（18:38）と。

さて、「この世に属する」価値観と背中合わせの生活を送る私たち。その中で、「イエス・キリストはわたし（たち）の王」と告白し生きる私たち。イエス様の国、「わたしの国（神の国）」に生きる喜びと意義について分かち合ってみてはどうだろう。

『聖書教育』より

「ピラトが言った『真理とは何か』は、単なる捨て台詞を超えて、私たちに根源的な問いを投げかける言葉でもあります。あなたの関心は、自己保身に向けられているのか、それとも『真理とは何か』を本気で求めようとしているのかが問われます。・・・私たちは、イエスの言葉、存在のどこに真理があるかと考えるのかと問われているようです。」（聖書の学び～3.真理とは何か）

【報告・祈りの課題】 ※次週の予告（オンラインのみ）

1. レント（受難節）に際して、主の受難を想起し、悔い改め祈る。
2. 2023 年度の最終月、主の恵みを数え、感謝し祈る。教会の必要が満たされるように。教会空調システム更新、教会墓園拡張計画が祝されるように。
3. 世界平和、一日も早い戦争状況の終息、停戦、終戦のために。生活困窮者の生命の護り、能登半島地震の被災者のために。～東日本大震災から 13 年
4. 座間伝道所の歩みのために～礼拝者が与えられ、また活動を支えるメンバーが与えられるように
5. 3/17（主）CS、主日礼拝〈相模原（宣教:斎藤協力牧師）・会堂（宣教:吉田牧師）〉、部会、部長会・役員会
6. 3/24（主）定期総会（予算総会）の準備のために
7. 3/31（主）イースター礼拝・墓前礼拝の備えのために
8. その他（個々人の祈りの課題）

--